へ宜被申入候事、

〔柳營雜載〕十一月四日、〇寛政四年　所司代へ達す書付、〇中略　一體最初群議等被添被仰進候後、御返答早速に不被仰出候者、御名器重大無此上御事、御孝心〇光格之處、是又御尤之至に付、品々御勘考被爲在候故にて候、其後必御無用之御旨趣、委被仰出候樣にとの處、右御返答之儀も未被仰出候者、總而三代之禮にも大宗小宗之際、嚴重に被定置候儀にて、尊祖重宗不貳斬、不分統之旨にて、先王之禮を制する無二三共有之、況萬乘之御位者、聖祖神之御寶位にて候へば、其位を不被踐、其統を不被繼して、其名を被爲上候儀者、不可然御事に候、罔極之御恩を被思召候所者、甚以御尤之御事に候へば、いかにも深御孝養者可被爲盡御儀に候へ共、御位號に於は、名分之不輕御事に候、且又御舊典御先蹤とても、總て御歷代之故事を皆先蹤として被遵行、舊典として可被守御事に無之者、勿論之儀にて、只其蹤を被尋糺、論說時勢道理之當否等、一々御取捨之上、無御差障者、可被遵行にて候、寔に於禮者不容易御事、上より下萬民に至迄、無私者禮之一事にて候へば、名器一動候ては、社稷蒼生之廢興安危にも拘候筋に可成行歟にて、甚御大切之儀に被思召候、已に今般之御進止者、後代之御規範、御大切之儀と迄其頃被仰進候は、甚以御尤之御旨趣にて、已に本邦之事而已にても無之、異域にも可相聞儀、無量之御大事に候間、古今之論說猶も御糺有之、先頃寫來候群議等、御不審之所不少候へば、御尋も有之、品により追々群議衆下向の儀も被仰出、御糺問有之、誠に御道理を被盡、論說無餘蘊、精々被盡極候思召にて候、右樣に不被爲在しては、可爲御規範重御旨にも御相當被爲在間敷との御事にて候、何れ御委敷御旨趣者、三卿〇正親町公明、中山愛親、廣橋伊光、下向御尋糺共有之上、可被仰進との御旨にて候、將又御領等被增進候類之儀者、太上天皇之御相應に、御領被進候類之儀には無之、尤御所等御造營之事、是又被仰進候には無之、只御孝養を被盡、御心閑に被在之候樣にとの御主意を以、御領にても、御藏米にても、御相應に可被增加哉との御事にて、已に天明四